

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
103-167	高等学校	数学	数学C	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
104 数研	数C710	新編 数学C		

1. 編修の基本方針

本教科書は、教育基本法第2条に示す教育の目標を達成するために、以下の3つを基本方針に据え、確実な数学的教養の育成を目指した。

- | | |
|---|---------------------------|
| 1 | 既習事項とのつながりから、知識・技能を定着できる。 |
| 2 | 豊富な図とスムーズな展開で、理解の定着を促す。 |
| 3 | 思考力、判断力、表現力を養う工夫がある。 |

2. 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
前見返し	<ul style="list-style-type: none"> 物体に働く力を考えるときにベクトルの考えが有効であることを述べ、ベクトルが物理で有用であることを感じられるようにした(第1号)。 2次曲線の性質が、望遠鏡などの技術に利用されていることを取り上げた。また、焦点と反射光の関係について図で示し、物事の原理を理解しようとする態度を養う機会を設けた(第1号, 第2号)。 行列が、3次元データの処理などの技術に利用されていることを取り上げた(第1号, 第2号)。 	前見返し1 前見返し2上 前見返し3 前見返し2下
第1章 平面上のベクトル	<ul style="list-style-type: none"> 向きと大きさをもつ量の例として風の吹き方をあげ、ベクトルの定義を考えやすいようにした。また、ベクトルの語源を取り上げ、抽象的なベクトルをイメージしやすいようにした(第1号, 第4号)。 ベクトルの内積と物理の仕事の関係を取り上げ、内積が実際に利用される例を知ることによって理解しやすいようにした(第1号)。 	6 ページ 30 ページコラム
第2章 空間のベクトル	<ul style="list-style-type: none"> ベクトル解析について紹介し、数学と物理学の間に密接な関係があることを考えられるようにした。(第1号) 	50 ページ

第3章 複素数平面	<ul style="list-style-type: none"> 複素数平面の別名である「ガウス平面」の名前のもととなった数学者ガウスについて紹介し、数学の発展に寄与した世界各国の数学者に関心をもてるようにした(第5号)。 	74 ページ
第4章 式と曲線	<ul style="list-style-type: none"> 2次曲線が身の回りで見つけられることに触れ、一見難しそうである2次曲線が身近に感じられるようにした(第1号)。 	104 ページ
第5章 数学的な表現の工夫	<ul style="list-style-type: none"> パレート図の題材として支出金額の例を取り上げ、実生活で数学を活用する態度を養えるようにした(第1号, 第2号)。 日本国内の発電方法とその発電量を取り上げ、エネルギー問題について関心をもてるように配慮した(第4号)。 経済センサス-活動調査に関する話題を取り上げ、日本の社会・経済について興味を持てるようにした(第2号, 第3号)。 人口に関する話題を取り上げることで、少子化や都市部への人口集中といった問題への関心をもてるように配慮した(第2号, 第3号)。 実生活で数学が活用されている例として、離散グラフに関する原理が、カーナビゲーションシステムや乗換案内アプリの最短経路検索に利用されていることを取り上げ、数学のよさを認識できるようにした(第1号, 第2号)。 	146～147 ページ 147 ページ 149～151 ページ 151 ページ 167 ページ
答と略解	<ul style="list-style-type: none"> 意欲のある生徒には自学自習もできるよう、補充問題・章末問題・総合問題の答と略解を掲載した(第2号)。 	176～180 ページ
数学のことば	<ul style="list-style-type: none"> 日常ではあまり用いられない数学特有の表現について取り上げ、真理を求める態度を養えるようにした(第1号)。 	181 ページ
さくいん	<ul style="list-style-type: none"> 自ら振り返って学習もできるようさくいんを入れた(第2号)。 	182～183 ページ
三角関数表	<ul style="list-style-type: none"> 三角関数の値の近似値を求める際に利用できるよう、三角関数の表を入れた。(第2号)。 	184 ページ
後見返し	<ul style="list-style-type: none"> ベクトルと複素数平面の関連を図を並べて示し、物事を様々な角度から考察する態度を養う機会を設けた(第1号)。 正葉曲線が係数を変化させると様々な形のものがあることを示し、数学の奥深さに触れられるようにした(第1号)。 	後見返し 1 後見返し 2

3. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

「1. 編修の基本方針」にのっとり、以下の点に特に意を用いた。

1 既習事項とのつながりから、知識・技能を定着できる。

既習事項とのつながりに配慮しているため、基本事項が確実に定着する。

●構成要素「Warm-up」 (7ページなど)

各章の既習事項に関する問題を章とびらに掲載し、その章で必要となる知識を簡単に確認できるようにした。

●平行四辺形になる条件 (21ページ)

四角形が平行四辺形になる条件は中学で既習の内容だが、高校ではあまり扱う場面がないため、改めて丁寧に説明した。

●三角比の表 (23ページ)

ベクトルの内積の問題では余弦の値がよく利用されるため、よく使われる角の余弦の値を表にまとめた。

●重心 (34ページ)

数学 A で学ぶ重心の性質を、脚注に図を入れるなどして改めて説明した。

●位置ベクトルの図形への応用 (36ページ)

項目「位置ベクトル」で学習した内分点、外分点の位置ベクトルの公式を実際の三角形に当てはめて用いる例を扱った。2つの項目「位置ベクトル」と「ベクトルの図形への応用」の橋渡しとなる。

●複素数平面の導入 (76ページ)

複素数の基本的な事柄は、数学Ⅱの「複素数と方程式」でも扱っている内容であるが、教科書ではそれ以降扱う場面がないため、用語などもあげて丁寧に説明した。

●漸近線 (114ページ)

「漸近線」という用語は数学Ⅱの「三角関数」「指数関数・対数関数」などで扱っているが、改めてその意味を脚注で説明した。

関連のある内容を統合的に理解するための工夫がある。

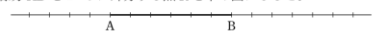
●構成要素「Point」

新構成要素「Point」として、内容的に関連のある複数の例について、互いにどのような関連があるのかを統合的に理解するための説明を掲載した。より確かな知識・技能の定着を図ることができる。

ウォームアップ

Warm-up 大々方

線分の内分点・外分点
線分 AB を 2:1 に内分する点 P, 線分 AB を 2:1 に外分する点 Q, 線分 AB を 1:3 に外分する点 R を下の図に示せ。



数直線上の内分点・外分点の座標
数直線上の 2 点 A(3), B(8) を結ぶ線分 AB について、次の点の座標を求めよ。
(1) 2:1 に内分する点 C (2) 2:1 に外分する点 D (3) 中点 M

2 点間の距離
座標平面上において、次の 2 点間の距離を求めよ。
(1) A(2, -1), B(5, 4) (2) 原点 O, A(-4, 3)

三角比の値, 三角比の等式を満たす θ
次のものを求めよ。ただし、(2)では $0^\circ \leq \theta \leq 180^\circ$ とする。
(1) $\cos 30^\circ$ (2) 等式 $\cos \theta = -\frac{1}{\sqrt{2}}$ を満たす θ

▶答は176ページ

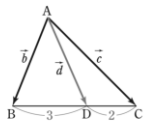
(7ページ)

A 位置ベクトルの利用

例 15 $\triangle ABC$ において、辺 BC を 3:2 に内分する点 D とするとき、 \vec{AD} を \vec{AB} と \vec{AC} で表す。点 A に関する点 B, C, D の位置ベクトルを、それぞれ \vec{b} , \vec{c} , \vec{d} とすると

$$\vec{d} = \frac{2\vec{b} + 3\vec{c}}{3+2} = \frac{2\vec{b} + 3\vec{c}}{5} = \frac{2}{5}\vec{b} + \frac{3}{5}\vec{c}$$


ここで、 $\vec{b} = \vec{AB}$, $\vec{c} = \vec{AC}$, $\vec{d} = \vec{AD}$ であるから $\vec{AD} = \frac{2}{5}\vec{AB} + \frac{3}{5}\vec{AC}$



(36ページ)

1 複素数平面

数直線上では、1つの点に1つの実数が対応している。ここでは、座標平面上において、1つの点に1つの複素数を対応させることを考えてみよう。



A 複素数平面

数学Ⅱで学んだように、複素数は 2つの実数 a, b と虚数単位 i を用いて $a + bi$ の形で表される。複素数 $a + bi$ について、 a をその実部といい、 b をその虚部という。たとえば、複素数 $2 + 3i$ の実部は 2, 虚部は 3 である。 $b = 0$ のときの複素数 $a + 0i$ は実数 a を表す。 $b \neq 0$ のときの複素数 $a + bi$ を虚数といい、とくに $a = 0$ である虚数 bi を純虚数という。

(76ページ)

Point

133ページ例9と例10では、133ページの1, 2を用いて極座標と直交座標を変換している。

極座標 (r, θ) $\xrightarrow{\begin{matrix} 1: \text{例} 9 \\ 2: \text{例} 10 \end{matrix}}$ 直交座標 (x, y)

(134ページ)

2 豊富な図とスムーズな展開で、理解の定着を促す。

図を用いて視覚的に理解を深める。

●ベクトルの終点の存在範囲 (42ページ)

実数 t の値によって変化する点の位置について、すべての場合を詳しく図に示した。

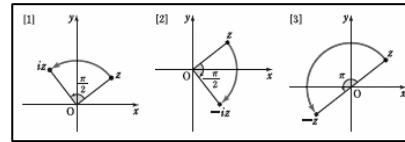
●複素数の積と図形 (89ページ)

原点を中心とする回転について、 iz や $-z$ などの基本的なものを図に示して詳しく説明した。

ベクトル方程式 $\vec{p} = (1-t)\vec{a} + t\vec{b}$ において、実数 t のとる値によって点 $P(\vec{p})$ の存在範囲は、右の図のようになる。
また、前ページの③について、 $1-t=s$ とおくと、次のことがいえる。

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b}, \quad s+t=1$$

(42ページ)



(89ページ)

学習がスムーズに進む「展開の工夫」「題材の工夫」がある。

●「ベクトルの図形への応用」と「図形のベクトルによる表示」 (36~44ページ)

「図形のベクトルによる表示（ベクトル方程式）」は、早い段階では生徒の負担が大きい題材であるため、「ベクトルの図形への応用」→「図形のベクトルによる表示」の順に取り上げている。

●極座標の導入 (132ページ)

新しい考え方である極座標の考え方を具体的な例を最初に扱うことでスムーズに取り組めるようにした。

A 極座標と直交座標

平面上に点 O と半直線 OX を定めると、この平面上の点 P の位置は、 OP の長さ r と OX から OP へ測った角 θ の大きさで決まる。ただし、 θ は弧度法で表された一般角である。このとき、2つの数の組 (r, θ) を、点 P の **極座標** という。極座標が (r, θ) である点 P を $P(r, \theta)$ と書くことがある。また、点 O を **極**、半直線 OX を **始線**、 θ を **偏角** という。極 O と異なる点 P の偏角 θ は、 $0 \leq \theta < 2\pi$ の範囲ではただ1通りに定まる。なお、 θ の範囲を制限しないこともある。

注意 ▶ 極 O の極座標は $(0, \theta)$ とし、 θ は任意の値と考える。

例 8 極座標で表された4点 $A(2, \frac{\pi}{4})$, $B(1, \frac{2}{3}\pi)$, $C(3, \frac{3}{2}\pi)$, $D(4, -\frac{\pi}{6})$ を図示すると、右の図のようになる。

(132ページ)

やや発展的なものは本文外の「研究」「発展」で扱い、本文が重くならないようにしている。

●三角形の面積 (29ページ)

ベクトルを用いて求める公式を扱った。

●円のベクトル方程式 (45ページ)

●複素数平面上の3点の位置関係 (101ページ)

複素数平面上の3点 A, B, C に対して、3点が一直線上にある条件、2直線 AB, AC が垂直に交わる条件を扱った。

●2次曲線の接線の方程式 (123ページ)

研究 三角形の面積

$\triangle OAB$ において、 $\vec{OA} = \vec{a}$, $\vec{OB} = \vec{b}$ とする。このとき、 $\triangle OAB$ の面積 S を、ベクトル \vec{a} , \vec{b} で表してみよう。
 $\angle AOB = \theta$, $0^\circ < \theta < 180^\circ$ とすると

$$S = \frac{1}{2} |\vec{a}| |\vec{b}| \sin \theta$$

$\sin \theta > 0$ であるから $\sin \theta = \sqrt{1 - \cos^2 \theta}$

したがって $S = \frac{1}{2} |\vec{a}| |\vec{b}| \sin \theta = \frac{1}{2} |\vec{a}| |\vec{b}| \sqrt{1 - \cos^2 \theta}$

$$= \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 - |\vec{a}| |\vec{b}| \cos^2 \theta}$$

よって $S = \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 - (\vec{a} \cdot \vec{b})^2} \dots \dots \textcircled{1}$

(29ページ)

3 思考力、判断力、表現力を養う工夫がある。

考えを深める要素を適切な場面で設定している。

●構成要素「深める」

新構成要素「深める」として、別の方法で考えてみる、理由を説明するなど、本質的な理解につながる問いを適切な場面に設定した。

脚注として掲載することで、本文と識別しやすいレイアウトになっており、生徒の理解度等によって、適切なタイミングで取り上げることができる。

大きさが1のベクトルを **単位ベクトル** という。

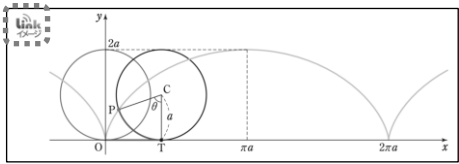
練習 9 次の問いに答えよ。
(1) 単位ベクトル \vec{e} と平行で、大きさが4のベクトルを \vec{e} を用いて表せ。
(2) $|\vec{a}| = 3$ のとき、 \vec{a} と同じ向き単位ベクトルを \vec{a} を用いて表せ。

深める 一般に、 $\vec{a} \neq \vec{0}$ のとき、 \vec{a} と平行な単位ベクトルは、 $\frac{\vec{a}}{|\vec{a}|}$, $-\frac{\vec{a}}{|\vec{a}|}$ と表すことができる。この理由を説明してみよう。

(15ページ)

●ICTの活用 Link マーク

教科書の内容に関連した参考資料，理解を助けるアニメーション，生徒自らが考察するためのツールなどのデジタルコンテンツを用意しており，インターネットに接続することで活用できる。紙面では表現が難しい動きをとまなうコンテンツもあり，生徒がこれらに触れることで理解を深めることができる。



(131ページ)

思考力，判断力，表現力を育成するための素材がある。

●総合問題

巻末には，思考力等を問う総合的な問題を取り上げている。「長文で構成された問題」「日常の事象や社会の事象を題材にした問題」など，「平面上のベクトル」「空間のベクトル」「複素数平面」「式と曲線」について章ごとに問題を用意しており，各章の学習を終えた段階で取り組むこともできる。

3 太郎さんは，ある島の財宝に関する古文書を見つけた。

井戸から松の木まで歩いていき，左回りに90度向きを変え，同じ距離だけ進み，そこに印Aを付ける。さらに，井戸から梅の木まで歩いていき，右回りに90度向きを変え，同じ距離だけ進み，そこに印Bを付ける。印Aと印Bのちょうど真ん中に財宝が眠っている。

財宝を見つけるために島に行くと，松の木と梅の木は見つかったが，井戸が見つからなかった。そこで，太郎さんは島の地図を複素数平面上に見立てて，井戸の位置を変えたときに，財宝の位置がどのようになるか考えることにした。

(174ページ)

●数学のことは

日常生活であまり用いられない数学特有の表現について，本文から参照を入れ，巻末でいくつか取り上げている。数学特有の表現について理解を深め，思考力や表現力の育成にも繋げることができる。(131ページ)

円が直線上をすべることなく回転していくとき，円上の定点Pが描く曲線をサイクロイドという。

すべることなく回転 (⇐⇒ 131ページ)

サイクロイドは，直線上を円がすべることなく回転するとき，円上の定点Pが描く曲線である。

たとえば，ペンキの付いたローラーで床を塗るとき，ローラーが床の上をすべることなく回転することで，ペンキをきれいに塗ることができる。このとき，床とローラーを真横から見て右の図のように考えると

ペンキが塗られた床の距離 と
ペンキを塗ったローラーの周の長さ
が等しくなる。すなわち， $OT = TP$ が成り立つ。

(181ページ)

4 生徒が興味をもてる紙面にしている。

●見返し

身近な風景写真や話題を用いるなどして，生徒が数学の世界に自然に入っていけるようにした。

●コラム

興味がわき，生徒自身が考えたり調べたりできるようなコラムを入れている。



(前見返し左)

5 ユニバーサルデザインに関する取り組み

●色づかい

色覚の個人差を問わず多くの人に見やすいよう，カラーユニバーサルデザインに配慮した。

●文字

本文等に，多くの人に見やすく読みまちがえにくいデザインの文字（ユニバーサルデザインフォント）を使用した。

通常のフォント

るような実数

ユニバーサルデザインフォント

るような実数

編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表, 配当授業時数表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
103-167	高等学校	数学	数学C	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
104 数研	数C710	新編 数学C		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

1 一般的な留意点

- 1 数学的なものの見方, 考え方を具体的に理解できるような展開・説明にし, 「知識及び技能」, 「思考力, 判断力, 表現力等」を習得できるようにするとともに, 数学のよさと数学を学習することのおもしろさが体験できるようにした。
- 2 学習者の立場に立ち, 論理的な飛躍がないよう, 基礎的な内容から順を追って説明した。また, 応用的な内容を取り上げる際には, より平易な計算になるように配慮した。
- 3 視覚面からの理解を容易にするため, 図やグラフを多用してビジュアルな教科書を実現するようにした。

2 教科書の特色

- 1 導入や説明では, 既に学習した内容とのギャップが少なくなるようにした。
- 2 例や例題はできる限り基本的な内容に絞り, 理解が容易になるようにした。また, 本文の理解を助けるために, 右横に補足的な説明や式を補った。
- 3 生徒の理解を容易にするために, 文章を読みやすくし, また視覚的な面では図版を多用したり, レイアウトを工夫したりした。
- 4 生徒が親しみをもって学習できるように, 色刷りの図版を豊富に使うなどして, 生徒の感性に近づける努力をした。
- 5 コラムを充実させたり, 本文の説明でも補足説明を充実させたりして, 数学を学習することの意欲が出るような配慮をした。
- 6 余力のある生徒のために, 学習指導要領における数学Cの範囲を超えた内容のうち適切と思われるものを, 発展で扱うようにした。
- 7 色覚の個人差を問わず多くの人が見やすいよう, カラーユニバーサルデザインに配慮した。また, 本文の和文書体として, 多くの人が見やすく読みまちがえにくいデザインの文字(ユニバーサルデザインフォント)を用いた。

3 教科書の構成要素

- [Warm-up] 各章の学習を始める前に確認しておきたい既習事項に関する問題である。各章の章扉に掲載した。
- [例] 本文の内容を理解するための導入例や計算例である。必要に応じて見出しを付けた。
- [例 題] 学習した内容を利用して解決する重要で代表的な問題である。「解答」や「証明」では模範解答の一例を示した。
- [応用例題] やや発展的な問題である。「解答」の前に、問題を解くためのポイントを「考え方」として載せた。
- [Point] 内容的に関連のある例、例題、応用例題について、互いにどのような関連があるのかを統合的に理解するための説明である。
- [練 習] 例、例題、応用例題などの内容を確実に身に付けるための練習問題である。
- [深める] 見方を変えて考えてみるなど、内容の理解を深めるための問題である。
- [補充問題] 各節の終わりにあり、本文の内容を補充する重要な問題である。
- [章末問題] 各章の終わりにあり、A、Bに分かれている。
A：その章で学習した内容全体の復習問題である。
B：総合的な復習と応用問題である。必要に応じてヒントを付けた。
- [研 究] 本文の内容に関連するやや程度の高い内容を扱った。場合によっては省略して進むこともできる。
- [発 展] 数学の学力が高い生徒の興味・関心を惹くために、学習指導要領における数学Cの範囲を超えた内容を取り上げた。
- [コ ラ ム] 数学のおもしろい話題や身近な話題を取り上げた。
- [総合問題] 思考力、判断力、表現力を問う総合的な問題である。章ごとの題材を用意しているため、各章の総仕上げとしても利用できる。
- [数学のことば] 日常生活ではあまり用いられない数学特有の表現について、本文から参照を入れ、巻末でいくつか取り上げた。

インターネットへのリンクマーク

この教科書に関連した参考資料、理解を助けるアニメーション、活動を効果的に行うためのツールなどが利用できる目印である。
インターネットに接続することで活用できる。



4 各章において配慮した点

第1章 平面上のベクトル ベクトルとその演算／ベクトルと平面図形

ベクトルは、生徒の負担、指導上の便宜を考慮し、平面と空間で章を分けた。第1節において、差の定義・説明を工夫した。また、ベクトルの内積の導入では、いきなり定義式を示さずに、三角形における余弦定理から示して、定義式の意味が理解できるように配慮した。第2節では、内分点・外分点の位置ベクトルの公式を実際の図形に利用する例をあげ、位置ベクトルとベクトルの図形への応用のつながりをスムーズにした。

第2章 空間のベクトル

座標空間では、原点からの距離だけを先に説明した。2点間の距離はベクトルを利用して求めることにして、章の最後に配置した。空間におけるベクトルは、平面上のベクトルを拡張することで自然と理解できるようにして、詳しい説明を省略した。また、平面に比べて理解が難しいため、図版を多用することで、理解が容易になるようにした。

第3章 複素数平面

あまり重くならないよう、題材を精選して取り上げた。また、数学Ⅱで複素数を扱ってから、この章まで教科書で複素数を扱う場面がないため、冒頭では用語を丁寧に説明した。図形を扱う場面が多いため、図版も多用し視覚的に理解できるよう工夫した。

第4章 式と曲線 2次曲線／媒介変数表示と極座標

主に図形を扱う章であるため、図版の色遣いを工夫し視覚的に理解できるように工夫した。また、サイクロイドの導入では拡大図を用いることで、より理解しやすいように配慮した。この章の教材では理論的な深入りをできるだけ避けたが、発展的な扱いも可能なように、そのきっかけとなる内容を「研究」で取り上げる努力をした。また、前見返しでは、2次曲線の焦点の性質やその利用例について説明した。

第5章 数学的な表現の工夫

日常や社会の事象に関するデータを、その種類や目的に応じて工夫して表現する方法の例として、「パレート図」と「バブルチャート」を扱った。どちらも題材として実データを用い、実生活で活用できることを実感できるようにした。行列の定義や和、差、実数倍では「ボールペンの販売数」を、行列の積では「自動車購入の判断材料」を、日常の事象を行列で表現する例として取り上げた。さらに、行列の和、差、積の基本的な練習問題も扱った。離散グラフでは「一筆書き」「最短経路（ダイクストラのアルゴリズム）」について扱い、行列との関連として「離散グラフの隣接行列」「経路の数え上げ」を扱った。

2. 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
第1章 平面上のベクトル 第1節 ベクトルとその演算 第2節 ベクトルと平面図形	(1) ベクトル ア(ア)(イ), イ(ア) ア(ア), イ(イ)(ウ)	6～49 ページ	19
第2章 空間のベクトル	(1) ベクトル ア(ウ), イ(イ)	50～65 ページ 67～73ページ	12
第3章 複素数平面	(2) 平面上の曲線と複素数平面 ア(エ)(オ), イ(イ)(ウ)	74～103 ページ	15
第4章 式と曲線 第1節 2次曲線 第2節 媒介変数表示と極座標	(2) 平面上の曲線と複素数平面 ア(ア), イ(ア) ア(イ)(ウ), イ(ウ)	104～143 ページ	24
第5章 数学的な表現の工夫	(3) 数学的な表現の工夫 ア(ア)(イ), イ(ア) 内容の取扱い(2)	144～171 ページ	20
計			90

※配當時数について

配當時数は、教科書紙面の内容を取り上げる時数を想定したものである。実際の授業では、具体的な事象の考察を通して数学への興味や関心を高め、数学をいろいろな場面で積極的に活用できるようにすることが求められており、そのような数学的活動のための時数も考慮する必要がある。

編 修 趣 意 書

(発展的な学習内容の記述)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
103-167	高等学校	数学	数学C	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
104 数研	数C710	新編 数学C		

ページ	記 述	類 型	関連する学習指導要領の内容 や内容の取扱いに示す事項	ページ数
66	点 P が平面 ABC 上にある条件	2	(1) ベクトル \vec{a} (り)	1
合 計				1

(「類型」欄の分類について)

- 1…学習指導要領上、隣接した後の学年等の学習内容（隣接した学年等以外の学習内容であっても、当該学年等の学習内容と直接的な系統性があるものを含む）とされている内容
- 2…学習指導要領上、どの学年等でも扱うこととされていない内容